

六甲台への移転の頃の思い出

M⑩ 竹内義治、宇田武一、竹嶋敏剛

1. はじめに

この寄稿文は、第2回座談会に向けて3人で少しずつ筆を執ったものを座談会席上で紹介した合作品です。

第2章で、竹内が当時の時代背景（世相）をまとめ、第3章で宇田がM⑩の50周年記念誌から移転の頃の思い出を数人分一括りにし、第4章で竹嶋が著作した思い出を今回一つにまとめました。

機械工学科の10回生は、昭和33年4月に入学し、昭和37年3月に卒業しました。4年生の夏休みに木造の2階建て西代学舎より新品のコンクリート造りの六甲台学舎へ移転しました。（宇田武一：中川隆夫研究室：記）

2. 当時の世相

当時の世相の概要を、経済的環境、技術的環境、政治・社会的環境に基づき以下に示します。

I 経済的環境

1. S31年経済白書にて《もはや戦後ではない》と発表された。
2. S33年7月から史上最長となる《岩戸景気》始まる。

II 技術的環境(新技術の揺籃期・・・S32～S33)

1. 南極観測（昭和基地開設）の開始。
2. 東海村にて初めての原子の灯点火。
3. 国産ロケット1号機（カッパーC）打ち上げ。
4. ソ連の人工衛星1号機の打ち上げ。
5. カラーテレビ実験放送開始。
6. 関門トンネル開通

その他

これらのI. IIを背景に技術者育成・強化が叫ばれ、国・公立大学の定員増員がはかられた。

神戸大学(工)に於いては機械工学科の定員が40名から50名となり計測工学科が新設された。機械工学科の精密測定講座が計測工学科に移った。

III 政治・社会的環境

S35年に日米新安保条約が調印された。

S34～35年大学全体として、関心高く抗議・阻止活動が活発となった。専門課程の我々も参加する事が多かった。

IV 神戸大学 学舎統合事業の始まり

全学部を六甲ハイツ跡（駐留米軍家族住宅）周辺に集結する構想の下に、学舎統合事業が始まり、工学部が最初の移転対象学部となった。

六甲台学舎は、2年に亘って建設され、西代学舎で学んでいた機械、計測、電気、化学の4学科と事務所関係がS36年7月竣工、8月の夏休みを利用し移転した。（竹内義治：山本明研究室：記）

3. 西代から六甲台への移転の思い出

昭和37年の神戸大学卒業生が構成するKUC37会・卒業50周年記念誌「この丘陵に」に寄稿された機械工学科からの20原稿の内、8原稿を「西代時代の思い出を語る座談会」（第1回座談会）で紹介した。

今回は「西代から六甲台への移転」に関する記事を抽出したが、極くわずかで文章のつなぎ程度にしか出てこなかった。学生にとって、それほど記憶に残る大きな出来事ではなかったのかもしれない。

寄稿文の中から移転がらみの文章を部分的に引っ張り出し箇条書き風にしてみた。以下に示す短いながらの各文章から、当時の10回生の思いを読み取っていただければ幸いです。（宇田武一：まとめ）

- *我々の卒業研究は、夏休みに学舎が六甲台に移転するため、機械器具の整理、梱包が中心で、夏休みまでの卒業研究は、塑性力学関連の英書購読が主であったように思います（西浦庸二：進藤明夫研究室：記）
- *西代の研究室は狭かったのですが、六甲台では研究室が広くなり、研究室のストーブで日清のチキンラーメンを作って遅くまで実験を続け…（西浦庸二：記）
- *古びた木造校舎の西代から新築鉄筋コンクリートの六甲台へ引っ越した不釣り合いのベラーだったが、その後何年活躍したか今はどうなっているか知らない（宇田武一：記）
- *夏休みには、六甲台に新校舎ができ、西代のボロ校舎から移転することになり、4年生全員が2週間ほどかり出され、運送屋の手伝いをしました（福井久和：山本明研究室：記）
- *我々機械工学科10回生にとっては、50年前の昭和36年は夏休みを返上し、企業実習を中止して、西代学舎での実験設備の移転準備作業と六甲台校舎での据付調整作業に大半を費やした記憶に残る暑い夏であった（竹内義治：記）
- *私自身は、戦後に建てられた床のきしむバラック校舎からピカピカの鉄筋建て校舎に大感激したものだ（竹内義治：記）
- *六甲台への引っ越しは4年生の夏休みを利用して行われ、卒業研究と並行しての引っ越しは慌ただしくも楽しいものであった（萩原武：川井良次研究室：記）
- *終戦直後に建てられた木造の西代学舎から最新の鉄筋コンクリート建築への引っ越しであり、感激の至りであった（萩原武：記）

4. 六甲への移転の頃（昭和36年夏）前後の学生生活

六甲への移転は在学期間8ヶ月を残すのみの卒業研究の中間点であった。従って、六

甲移転前後の思い出を語るとすると、自分の専門課程での2年半を語る事になってしまふ。もう半世紀以上（53年）前の移転作業の詳細はすっかり忘却のかなたに飛び去ってしまったが…。

専門課程に行つてまず感じたのは、小学校のような木造校舎をはじめとする貧弱な設備群であつた。

昔の高等工業時代の設備や建物が立ち入り禁止状態であっても、窓を通して見えるところが多々あり、戦災以前の想像される「かなりの立派な設備群」が推定される一方、復旧が進んでいない現状を見て、落胆した学生が多かつたのではなかろうか。

戦災を受けなかつた大学や高等工業（高専）に比べて、当時おおきなハンデキャップを負つていたのであろう。

神戸大学工学部50年史を隅々読んでいたら、神戸高等工業の教育方針の中に、「教科書主義」、「無試験無落第方針」とか「規律・持続・執着」とか書かれており、高等工業学校時代の中に光るものが多々あるのを見る。又、ボイラの運転実習、自動車の運転実習などが行われており、実際に機械に接する機会が多く与えられていたのを知る。

六甲に移転後、先生方の努力が実り、建物・付帯設備の整備とともに、大学院が出来、修士課程、博士課程が整えられて、大学として充実して来た事は喜ばしい事です。

卒業研究は「鋼の回転曲げ疲労試験における塑性力学的挙動」という題名だつたと思うが、要するに、1年間、Woeler式の回転曲げ試験機でデータ採りをして、それをまとめたという事であつた。

Woeler式試験機をトラックに載せて、昭和36年の8月初めに長田区西代から六甲山に運ぶ手伝いをし、トラックの上に乗つたように記憶する。別グループでは衝撃試験機を使つていたので、それも載せたのだつたと思う。

六甲の機械実験場はすでに機械の基礎穴が出来ていた。基礎が固まるのをまって、我々は又実験を開始し、最終報告は機械学会の関西支部で3月末に発表した。

第2講座では疲労に関しては「The Fatigue of Metal」(by Moor & Kommers) などの輪講も行った（原書を分担してガリ版づくりまでやった）が、専門すぎて、先生の研究のお手伝いをしたという印象のみが残つた。

移転後、慌しく卒業し、実社会に出て実際に機械の設計・製造・運転の現場に立たされた後で、もう少し時間が欲しかつた、もう少し「実学的能力」を身につけて卒業したかつたなあと、折に触れて思つた事であつた。（竹嶋敏剛：中川隆夫研究室：記）

5. むすび

我々は入試の頃から工学部は六甲台に新設・移転されるであろうことを知つていた。若干移転が遅れたような記憶があるが、M⑩⑪生は専門課程を西代と六甲台の2か所で過ごせたラッキーで珍しい学年であつた。高度成長に合わせ、工学部も拡大していった時

期と合致する発展途上時代であったと思う。

学生は移転作業には直接関わっていなかったが、勉学に励むべしというご配慮だったような気がするが、苦勞をしていない分記憶も薄い。(宇田武一：記)

(終)

寄稿日：平成 27 年（2015 年）1 月 3 日 座 02-01